
超者ライディーンStrikerS

ジャン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

超者ライディーンStrikers

【ZPDF】

Z0984Q

【作者名】

ジョン

【あらすじ】

- ・・・孤独を共有する少年少女・・・
- ・・・戦いを選んだ少女の前に現れたのは・・・
- ・・・鋼鉄の翼を持った天使だった・・・

第一話 翼の戦士立つ

訓練校にて魔導師の卵達が日々訓練をしていた。

だが魔導師だけが局に勤められるのではない。中には優秀な補助魔導師やデスクワークを中心にする魔力のない者もいる。

「…………」

この少年・御崎陽介もその一人だった。

「…………ですから」

講義を聞いている陽介はここ最近不思議な夢を見るのだった。

第一話 翼の戦士立つ

(・・・・・掴み取れ・・・)

(・・・誰だ?)

陽介は夢の中に居た。

何もない空間

そして目の前に舞い降り3本足の鳥。

「誰だ！」

3本足の鳥が人の姿をし始めた。

「な！」

陽介は驚いているその姿は

鋼鉄の翼を持つた天使だった

「御崎！」

「いでー！」

教師にたたき起こされる陽介だった。

昼休み

「はあ～」

陽介は昼食がてらパンやサンドイッチを食べていると……

「陽介！」

「痛！」

ハリセンで叩きつける少女ティアナ・ランスター。

「ん？ ティアナ？」

「あんたまた居眠りしてたでしょ！ 事務課だからって手を抜くな！」

「へいへい」

陽介にとつてティアナとは古い友人である。幼い頃に天涯孤独になつたティアナと知り合い同じく天涯孤独となつた陽介も馬が合いくつに逢つよくなつた。

「全く……」

「すみません」

陽介はティアナのことをお節介な姉のように思つておりティアナ自身も陽介を世話のかかる弟のように見ている。

「はあ～正直あんたが羨ましいわ……」

「え？」

ティアナの言葉が分からぬ陽介。

陽介にしてみれば魔力も何もない凡人の自分にしてみればティアナは魔力もあり学力も優秀であった。陽介の方がティアナのことが羨ましかつた。

「どういう事だよ？俺なんか貧乏学生だぜ？訓練校に入ったのだって選学金両当てだし」

「そうだよね～いい～忘れて」

と言つて手をヒラヒラさせたティアナ。

「あー…そうだ」

ティアナがチケットを取り出した。

「今度のコンサート。ちゃんと付き合いなさいよ

「何で俺が？友達いないの？」

「キャンセルされたの！でなきゃあんたなんて誘わないわよ！」

と激怒される陽介。

「はあ～」

ティアナと別れまた一人になつた陽介。

(ティアナにあの夢のことはなせばよかつたかな?)

と陽介は夢のことを考えていた。

(あの黒い翼の戦士は俺に何か話しかけてきた。なんなんだ? 超魔
つて)

黒い戦士の言葉

超魔を倒せ

陽介にしてみれば魔法世界であるミッドルダ。その世界にいる者は魔法が使える。だが魔法が使えない陽介は異端の存在と言える。(ともかくにも準備しないとな~)

と思いながら陽介は自宅に戻り準備を始めるのだった。

準備が整いコンサート会場に着くと・・・

「遅い！」

「へいへい」

ティアナが待ちくたびれていた。

「これこれ」

購買でジコースやらライトイやら買って席に着く陽介とティアナ。

そしてコンサートが始まり会場は熱狂した。

「ティアナ。今日の友達どうしたのよ」

「ん？お節介な友達だけ？」

「ふうん友達ね」

「なによ」

「いや。ティアナに友達が出来たんだな～って」

陽介の表情にムッとするティアナ。

コンサートも中盤に差し掛かったその時。

「...」

陽介が何かの気配を感じ取った。

「ん？ 陽介どうしたの？」

「ティアナ？」

陽介以外は何事もないかのように振舞っている。

その時だった。

巨大な怪物が現れコンサートのスタッフ達に襲い掛かった。

「・・・なんだ・・・あいつ？」

「え？ どうしたの？」

陽介が見ている怪物の姿をティアナは何も無いかのように見ている。

「ティアナ・・・見えないのか？ あいつが！」

「だからなんなのよ？」

怪物はスタッフに襲い掛かると今度はバンドマン達に襲い掛けた。

吹き飛ばされるバンドマン達。

しかし観客達は演出だと思い込んでいた。

そして一人が空中に放り投げられた。

「くそ……」

「なにこれ！？」

ティアナも異変に気づいた。突然天井に風穴が開いた。

怪物が上昇したからだ。

「なんだよこれ！？」

陽介はあとを追つた。ティアナも異変に気づき陽介のあとを追つた。

屋上に出ると怪物と対峙した陽介。

「お前何者だ！？」

「ほひ・・・俺の姿が見えるのか？・・・貴様・・・ライティーン
か？」

「なに！？」

怪物の言葉が陽介は分からぬ。

「陽介！」

「ティアナ！」

怪物はティアナの姿を見るとティアナに襲い掛かった。

「え？」

ティアナは突然自分に来た衝撃に混乱している。怪物はティアナを掴み取るとそのまま屋上から投げ飛ばした。

「ティアナああああ！」

目の前の怪物に突き落とされるティアナ。怪物はそのまま陽介に襲い掛かった。

ティアナともども真っ逆さまに落ちてしまつ陽介。

(・・・テイアナ・・・<!)

陽介が死を覚悟したその時

・・・掴み取れ・・・

۲۷۰

陽介の夢に出てきた黒い鋼鉄の翼を持つた戦士の声が響いた。

お前に

(誰だ!?)

・・・翼を広げよ、ウ・・・

・・・その言葉共に現れた羽・・・

・
・
・
・
陽介は
・
・
・

・・・ゴッドフューザーを掴み取つた・・・

「超者！光臨！！」

「いのちをめぐらすおとこは、おとこでござる。」

黒い影がティアナを抱きかかえた。

「・・・え？」

ティアナはふと自分が宙に浮いていることに気づいた。そのまま誰かに優しく寝かされた。

—
•
•
•
•
•
•
•

ティアナの目にははつきり映っていた。

(· · · あれば · · 黒い · · 天使 · ·)

それだけ言うと示イアナは意識を手放した。

「ああああああああああああああ！」

怪物と陽介は組み合ひながら飛行した。

(何故たる處の方かわかる)

陽介はイメージの通りに力を引き出した。

レイアン！ インバリア！！

怪物に向かって衝撃波が放たれ吹き飛はされた。

「レイヴン！ デイバイダー！」

陽介の左腕に巨大な盾が現れた。

「小鳥丸！」

陽介は盾から刀を引き抜きそのまま魔物に突撃した。

「…………」

一刀両断される怪物はそのまま消滅した。

戦いが終わり静かな夜になつた。

• • • • • • • • • • • • • • • •

陽介はビルの屋上に着陸し、糸纏わぬ元の姿に戻った。

「・・・どうなつちまつたんだ・・・俺は?」

突如ライティーンに覚醒してしまった事に陽介は戸惑うのだった。

第一話 翼の戦士立つ（後書き）

オーガンはしばらく出ません。

第一話 ゴッドバード

數力月後

「えつとこれとこれ」

時空管理局経理課に就職した陽介。伝票整理やらとにかく事務仕事が多かった。

「ええつといの後は・・・」

とりあえずこの後の予定を確かめる陽介。

そんな陽介を見つめる一人の女性の姿が。

第一話 ゴッドバード

「
」

とりあえず洋食屋で昼食をとつた陽介。ふと左手を見つめた。

(・・・夢・・・じゃないよな)

「つら浮かび上がる『シドフロザー』。

(・・・ぐわ)

誰にも相談することの出来ない事……己が他とは違う異型の存在ライディーンになつた事。

「そういえば……ティアナの奴元気にしてるかな?」

と黙つて端末を取つるとすると

「……」
「まちがは」

一人の女性が背後から現れた。

「?誰ですか?」

「……はじめまして。フロイト・T・ハラオウンです」

女性はサングラスを外し自己紹介した。

「あなたは……ティアナの上司?何か用ですか?」

「ええ。ライディーン・レイヴンさん

「……」

陽介は警戒した。何故目の前の女性が自分がライディーンである事を知つているのか。

1<!

思わず逃げ出してしまった陽介をフェイトは飛行魔法で追跡する。

「うわー！」

飛ぶフエイトに抱き上げられ空中に浮かべられる陽介。

「...アーティスト...」

空母ジニアリの陽介アマヤアモ・・・

一
じゆくの櫻の子

え？」わああああああああああああああああああああ！」

益中が心真に、遠の冊は落んでいくと、

早く飛んで、て感じで……急いで……」

スロイドの言葉に陽介は急した

(飛へ・・・飛へ・・・)

地面に激突する寸前陽介の背中から鋼鉄の翼が生え滑空した。

「なんだこれ!?」

空を舞う陽介しかし・・・

「・・・嘘だろ」

地上に居る人間は陽介の姿を見ていない。

「まさか・・・皆には見えてないのか?」

「もうだよ」

「え?」

陽介の元に舞い降りるフェイト。

「ライディーンの状態になつた君は普通の人には見ることはできない」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

フェイトを疑いの眼差しを向ける陽介。

「その様子だとなんで私が貴方の事が見えるかつて知りたいみたいだね・・・着いてきて」

陽介はフェイトに案内されるまま地上に舞い降りフェイトの車に乗つた。そしてそのままカフェに行き事情を聞くことになった。

「あんた・・・超魔について知ってるのか?」

「まあ詳細を知ってるわけじゃないから・・・ただライディーンが現れたことは知ってる」

「え？」

フェイトは微笑んで言った。

「何故か分からぬけど……私にはあなた……ライティーンの事が見えてしまったのでした」

「……そんな」

「ライティーンの姿を見ることができるのは私だけじゃない……機動六課の一部のメンバーは見ることができる」

「…………」

ティアナにバレたと思った。するとフェイトは一言言った。

「それじゃ……本題に入るけど……あなた……機動六課に来るつもりない？」

「へ？」

「あなたの力が必要なの……超魔と戦うために……あなたの記憶を辿れば……もしかしたら……超魔の目的がわかるかもしない」

「ちょっと待てよー俺が聞いたことなんて超魔を倒せつて事と翼を『えるくらいだぜ！』

「けど……お願いします」

陽介に頭を下げるフェイトしかし。

「嫌だね」

「え？」

そのままフェイトから去つてしまつ陽介。

一見冷たい態度をとる陽介。だが戦う気がないわけじゃない。

(人に指図されて戦うなんて真つ平ごめんだ)

その時

「！！」

何かの気配を感じ取り陽介は何処かの公園に走つた。

「・・・・・」

公園の電柱の上に座つてゐる超魔。

「ぐふふふふふ」

まるで狩りの獲物を定めているように見える。

「ヌオオオオオオアアアアアアアアアアアアアア！」

超魔が見ず知らずの人に襲いかかるうとしたその時。

۱۷۸

超魔の攻撃を受け止める陽介。

「何あの人・・・勝手に吹っ飛んじゃつたよ」

一見ちやダメ

と描差される陽介。

「おひいきだー。」

そんな野次を無視し陽介は超魔を誘い出した。

貴様・・・まさか

超魔も陽介の正体に勘付いたのか。陽介を追いかける。

人気のない場所に誘い込んだその時

「超者！降りつゝ臨！－！」

陽介の左腕にゴッドファーザーが浮かび上ると神経が浮き上がった。

覚醒の衝撃で衣服がハつ裂きになり光で覆われる。

衝動が頂点に達すると陽介はライディーン・レイヴンに覚醒した。

「ライディーン……邪魔はさせん！！」

גַּם־יְהוָה־

超魔の攻撃を受け止める陽介。そのまま地面に叩き付けると上昇した。

「レイヴン！ インパルス！！」

陽介の衝撃波に吹きとばされる超魔。すると身体中から触手を生やし陽介を絡め取つた。

「レジデンス」

「どうだ身動きが取れまい！？」

「おおおおおおおお・・・・」

無理矢理引き千切ろうとする陽介だがうまく力が入らない。

その時

「バルディッシュ！」

金色の閃光が触手を切り裂き陽介を解放した。

「ぐあ・・・」

「大丈夫？」

「あんたは」

陽介の目の前に現れるフェイト。そして超魔は再生を果たす。

「くー・ビツすれば」

「奴を倒すには強力なエネルギーを叩き込むしかない」

「強力なエネルギー？」

「ゴッドバードチエンジを！」

「え？」

「あなたが知らなくてもあなたの記憶が知ってるはず」

フェイトの言葉に陽介は記憶を探ると・・・イメージに現れる靈鳥の姿・・・

そして陽介は舞い上がった。

「ゴッドバアアアツドー！ チェンジー！」

陽介の身体が変形し3本足の鳥の姿になる。

そのまま光のエネルギーを纏い超魔に突進した。

超魔の身体を貫く陽介

ゴッドバードに貫かれ燃え上がり消滅する超魔。

「ふう・・・終わった・・・」

ライディーンの姿から戻る陽介その時違和感を覚えた。

「なんかスースーするような・・・は!!」

陽介が己の姿を見ると生まれたままの姿・・・

早い話が丸出しで立っていた。

「うわー！ わざわざ

必死に前を隠す陽介その時、陽介の前に車が停まつた。

「ちょっとー早くこれ着てー！」

「うわー！」

車からフュイトが着替えを投げ渡した。そのままフュイトの車に乗り込む陽介。

「全く……」いつ事があるからサポートするって言つたのに

「…………」

何も言えなくなる陽介

「まつ変質者で逮捕されたくなかったらウチに着なさい」

「ぐぐぐ」

と中がフュイトに脅迫されながら陽介は機動六課に入ることになつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0984q/>

超者ライディーンStrikerS

2011年10月6日03時46分発行